



オーストラリア・ナショナリズムの変化と先住民

窪田, 幸子

(Citation)

キリスト教文明とナショナリズム : 人類学的比較研究(国立民族学博物館論集, 2):351-369

(Issue Date)

2014-03

(Resource Type)

book part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003721>



オーストラリア・ナショナリズムの変化と先住民

窪田幸子

はじめに

オーストラリアは1788年に入植がはじまり、1901年に連邦が成立した新しい国である。この年に国家としての形をとることになったオーストラリアは、移民政策として白豪主義を採用し、白人の国としてのナショナリズムを形成していった。有色人種を排除し、特定の移民だけを受け入れ、アングロ・サクソンの文化伝統を中心とする社会をめざしたのである。キリスト教もその一部として、ナショナリズムに貢献した。一方、先住民であるアボリジニに対しては、当初は徹底的に排除し、その後強力な同化政策がとられてきた。その政策の中心にあって力をふるったのもキリスト教ミッションであった。

白人中心のオーストラリア・ナショナリズムは戦後、大きく変化した。1970年代からは、オーストラリアは、多文化多元的な政策を展開した。古いナショナリズムを否定することで、あらたなナショナル・アイデンティティを打ち立てようとしてきたといえる [Attwood 2005]。

1990年代から2000年代はじめにかけては「謝罪; Sorry」が社会的キーワードであった。本論で詳しく論じるように、先住民であるアボリジニの「盗まれた世代 (stolen generation)」問題が大きな注目をあつめ、彼らに対して国家が謝罪をするのかどうかについて意見が二分される形で盛んに議論されてきた [Goot & Rowse (eds.) 2007]。連邦成立100年記念の2001年を目前にして、ナショナル・アイデンティティの再構築が必要であったオーストラリアにとって、アボリジニをどのように位置づけるのかは、枢要な問題であった。

多文化主義の国として、多様な移民集団の諸文化を尊重すると同時に、先住民集団であるアボリジニの文化も尊重する「新しいオーストラリア」のためには、現在も続くアボリジニの苦悩を解決し、彼らをオーストラリア国家の一部として取り込むことは避けられない課題であり、アボリジニのおかれた状況を改善し、彼らとの関係を修復することが目指されてきた。こうして、イギリスによる植民開始以来、アボリジニに対してとられてきた様々な歴史的不正義を、

国家の歴史として受け入れ、謝罪するのか否か、という問題が現実的に議論されることになったのである。特に「盗まれた世代」問題は、子どもに対する政策であり、家族のつながりを破壊したものであったため、広く人々の関心を集め、メディアにもさかんにとりあげられた。[たとえば Bird (ed.) 1998]。

キリスト教ミッションは同化主義の時代に、この「盗まれた世代」政策の実行に大きな役割を果たした。この問題が批判的に注目を集めるようになる中で、キリスト教の植民地化における役割も批判的にみられるようになっていった。本論では、盗まれた世代問題に焦点をあて、アボリジニの存在がオーストラリアの新しい国家アイデンティティの形成にどのような役割を果たしたのかを考察しよう。その際、キリスト教への批判にも目配りをしつつ、先住民アボリジニの社会的位置の変化とナショナリズムの変化との関係性を論じてみることにしよう。

1 「盗まれた世代」という問題

「盗まれた世代」(Stolen Generations)とは、1869年から1970年ごろまでオーストラリアで行われていた先住民を対象とした政策で、アボリジニとトレス海峡民出自の、おもに混血の子供を家族から引き離し、キリスト教会や政府の運営する寄宿学校や孤児院に收容し、教育を行うものであった。この政策は各植民地政府の法令によって実行に移されていった。最もはやいのがビクトリア植民地で、1869年にアボリジニ保護制度(Board for the Protection of Aborigines)が設立され、アボリジニの子どもの強制的移動が行われるようになり、他の植民地もそれに続いた¹⁾。「人種の浄化(cleansing)」をめざす同化主義的政策であったといつてよい。混血の子供をアボリジニの家族から引き離して教育することで、主流社会への同化をすすめようと考えられていたのである。

当時のオーストラリアでは、アボリジニは劣等人種と考えられており、入植の過程で排除された「過去の」存在であった。そして、残っているアボリジニに対しては、管理と同化が強化され、彼らの権利を認めない政策のもとに、保護区に閉じ込め、徹底した同化政策が行なわれた。アボリジニの管理には、多くの場合キリスト教ミッションがあつた。この過程でおこなわれたのが、混血の子どもの引き離し政策であった。この政策のもとに引き離された子供は、家族親族とのつながりを断たれ、徹底して英語での教育をうけ、母語を失い、ルーツと文化を失い、精神的肉体的虐待をうけたものも少なくない。

1980年代になると、歴史家たちの間で、この問題を巡る議論が盛んになっていった。ピーター・リードが1981年に出版した本で、「盗まれた世代 (Stolen Generation)」という表現を最初に使ったのだが [Read 1981]、この用語はそれ以降、多くの報告や出版に現れ、オーストラリアで広く一般的に共有される語彙となっていった。

1995年、労働党のキーティング首相は、「盗まれた世代」問題の具体的な内容を調査し、その対応を模索する目的で、調査委員会 (National inquiry into the Separation of Aboriginal and Torres Strait Islanders Children from Their Families) に調査を委託した。委員会は、1995年から96年にかけて調査を行い、777件の意見陳述を受けた。そのうち7割近くは先住民自身によるものであり、1パーセントが政府関係のもの、そして6パーセントが教会によるものであった。これらの意見陳述に基づき、1997年には『家庭にもどそう (Bring Them Home)』と題した報告書が提出された [HREOC 1997]。

報告書は、正確な人数は不明だとしながらも10万人の犠牲者がいた可能性を指摘し、1910年～1970年の間に、少なくとも10人に1～3人のアボリジニの子どもが強制的に家族から引き離されたとした。そのうえで、連邦政府と州政府に対して、この行為は民族殺戮 (genocide) であったことを正式に認知し、謝罪し、賠償を行うべきであるとし、この報告書が提出された5月26日を「謝罪の日 (Sorry Day)」とすることも含めた54項目の提言をおこなった。報告書には、インタビューによる多くの具体的な事例が集められた。家族、親族やコミュニティとの紐帯を切断されてうけた精神的な外傷や、施設やその後子供たちが派遣された仕事先での、日常的で差別的な暴力などについての具体的な告白が続き、同時に子供を盗まれた家族や親たちの長い苦しみと悲しみ、そして恐怖の経験が語られたのである。キリスト教会はこの政策において中心的な役割を果たした。この問題が社会からの注目を集めるようになる中でキリスト教会への批判的見方も広がった。

「盗まれた世代」政策は、地域によっては1970年代まで続けられていた。つまり、この報告書は暴力的な植民地の歴史が、ほんの最近まで継続していたという事実を人々に突きつけたものであった。自己のアイデンティティを否定され、家族との絆を失ったアボリジニの痛みと、苦しみは、現在進行形であり、現在の社会的苦境にもつながっていることも指摘された。人間の基本的な感情に強く訴えかける内容の報告書であり、同情が集まり、社会的関心が高まった [HREOC 1997]。

2 アボリジニへの不正義をめぐって

歴史的な経緯

オーストラリアは、1970年代に多文化主義の立場をとり、それを新しい国家的アイデンティティとするようになった。その中であって先住民であるアボリジニの文化の独自性を認め、彼らの権利を拡張していくことも推進されていた。1980年代から2000年代のはじめにかけて、アボリジニは広く国家的な注目を集めつづける存在であったが、その中であって、特に「盗まれた世代」問題には、大きな関心がよせられた。まず、時系列に従って、社会的背景の中に、その経緯を照らしてみよう。

イギリスによる入植以来、収奪と排除をうけつづけてきたアボリジニは、1967年の国民投票によってようやく、他の国民と同等な扱いを手にし、土地権などの権利主張を強めていった。1970年代には、活動家のアボリジニを中心として抵抗運動が活発になった。1972年にはアボリジニ大使館が国会議事堂前に作られ、その抗議活動と政府による排除の動きは社会的な注目も集め、彼らの活動の中心となっていった²⁾。北部ではアボリジニを無視した開発への抵抗がつづき、土地権運動が展開された。アボリジニのストライキや裁判など、人々の耳目を集める事件が続いた³⁾。1980年代には、労働党政権のもとでアボリジニの土地権と賠償を拡大させる政策が進展し、差別撤廃、平等な扱いへの試みが続いた [Goot & Rowse (eds.) 2007]。アボリジニの社会的苦境についての関心も高まった。特に、アボリジニの異常に高い検挙率、拘置率、そして刑務所での死亡率が社会的問題として注目され、政府は1987年に、王立委員会 (Royal Commission into Aboriginal Deaths in Custody) を設置し、調査を行い、その報告書が翌年に出された [RCDC 1998]。

この時期のオーストラリアは、複数の大きな記念年を目前にしていた。1988年は、最初の移民船到着200年記念の年であり、2001年は、連邦成立百年記念の年であった。2000年にはオリンピックも予定されていた。こうした大きな節目を前にして、共和制移行を視野に入れた議論もつづいていた。オーストラリアという国家が、英国という大きな傘から離れるのかどうか、どのような国として21世紀に向かうのか、新たなオーストラリア・アイデンティティが求められた時期であったのである。そして、その新しいオーストラリアの中に、アボリジニを定位しなおしていくことが必須であった。

そのために必要だったのが、「暴力的過去」という問題の解決であった。アボリジニに対するこれまでの暴力をどのように再文脈化するのか、という問題は、国家の歴史をどうとらえるかという問題に直結したのである [Attwood 2005]。植民地化に伴うアボリジニに対する暴力は、強制移動、強制労働、殺戮、社会的排除など多様であったが、そのなかで「盗まれた世代」問題は、さらに大きな注目をあつめることになってゆく。

1980年には、ニューサウスウェールズ州で、NPO 組織である「リンクアップ (Link-Up Aboriginal Cooperation)」が設立された [Web ページ Link-Up NSW]。これは、「盗まれた」ために自分の出自がわからなくなってしまったアボリジニの人々のルーツ探しを助ける組織であった。同じころ、南オーストラリア博物館にも、ルーツ探しを助ける「家族さがし」部門が作られた。この博物館には、人類学者ティンデルが1930年代から1950年代にかけて集めた膨大なアボリジニの家系図データがあり、同時に彼がとった多数の写真があった。それらを利用してルーツ探しの手助けをしようとするものであった。つまり、1980年代初めまでには、アボリジニたち自身の間でこの問題が重視されるようになっていたことがわかる。

1988年の最初の移民船到着200年記念の年、オーストラリアは祝祭ムードに包まれていた。この年のオーストラリア記念日に先住民の人々による抗議デモが行われ、数万人余のアボリジニが全国からシドニーに集結した。アボリジニ側の主張は、この日は侵略の日 (Invasion day) であり、この200年間にアボリジニは土地を奪われ、権利をはく奪され、祖先が殺され続けてきたとして、シドニー湾まで「服喪の行進」をおこない、権利回復を訴えた。この出来事は、人々にアボリジニの問題への対処が必要であることをあらためて認識させる機会となった。

また、1992年には、マボ判決がだされた。オーストラリア大陸は、テラ・ヌリウス (無主地) であったというそれまでの立場を否定する判決で、アボリジニの先住権を認めることとなった。これは、それまで明確には認めてこなかった過去の国家的暴力を準公定歴史として認めたことを意味する判決だった。「オーストラリアはアボリジニからの剥奪と、虐殺の上に成り立っている。」ということが公に受け入れられたのであり、オーストラリアの植民地主義の時代の不正義を、今日の人々が認め、向き合おうとする土台を提供することを意味したといえる。

公式謝罪をめぐる

1992年の12月10日に、キーティング首相（1992～96）が、レッドファーン・アドレスとよばれる演説を行った。マボ判決ののちに行われたこのスピーチは、オーストラリアの過去についての新しい見解を示したものであった。1993年の国連世界の先住民の国際年の開始にむけて行われたのだが、この中で首相は、歴史上はじめて、オーストラリアへの入植の歴史が、アボリジニの伝統的生活と文化を崩壊させ、そして子供たちを暴力的に連れ去ったとして、「盗まれた世代」問題を国家の過去のあやまちとして認識すべきであるとする見解を公にした。以下はその演説の一部である。

我々は、認識することからすべてを始めなくてはなりません。誰が剥奪を行ったのかという認識です。我々は伝統的土地を奪い、伝統的な生活様式を破壊しました。疫病とアルコールを持ち込みました。我々は殺戮し、母親たちから子供たちを奪いました。我々は差別と排斥を行ったのです。

（中略）

それは、我々の無知と偏見でした。そして、そうしたことが自分たちにされたらどうであるかという想像力の欠如でした。いくつかの気高い例外を除いて、われわれは、基本的な人間的対応を怠り、彼らの心と感情に入りこめなかったのです。我々は、これが自分にされたらどう思う？と尋ねることをしなかったのです⁴⁾。

このように、キーティング首相は、はっきりと「盗まれた世代」問題を国の責任であると指摘した。そして、1995年には、調査委員会に「盗まれた世代」についての調査を依頼し、1997年5月26日に報告書が提出され、国家による公式謝罪が進言された。これに対して各州の知事や関係大臣たちは、次々と公式謝罪を行った⁵⁾。しかし、この時の首相は公式謝罪を拒否したのである。

報告書が提出された1997年の段階では、政権が交代し、首相は保守党のジョン・ハワードであった。彼は、過去の子供の引き離しに対して遺憾の意は表明したものの、現在のオーストラリア国民は、過去に行われた不正義に対して責任を持たないとの立場を明確にした。ハワード政権は、王政復古的な姿勢で、イギリス連邦の一員としてのオーストラリアを重視した。それとともに、アボリジニに対する施策も次々と後退させていった。また、キーティング時代の歴史認識を、「喪章をつけた歴史観」として批判した。各地で行われたといわれ

る大量虐殺についても歴史的史実はなく、大げさな誇張であるとして、否定的見解をとった。初期の植民者の業績が現在のオーストラリアの繁栄につながったのであり、それを軽視すべきではない、との立場を貫いた。首相のこのような態度への批判が噴出し、1990年代を通じてオーストラリアの歴史を巡って、論争がつづき、歴史戦争と呼ばれた。

ハワード首相の立場はかつてのアングロ・サクソンを中心とした同化主義的な立場につながるものであり、古いオーストラリア・ナショナリズムとよべるだろう。移民受け入れについても消極的な姿勢をとり、彼の態度を象徴していた。しかし、彼は、1996年から2008年までという長期にわたって、安定した政権を築いた。このことは、オーストラリアに存在し続ける古いナショナリズムへの親和性を示しているといえる。しかし、この長い政権の間、彼が謝罪を拒否したゆえに、アボリジニへの公式謝罪をめぐる議論は、国家全体で盛り上がったともいえるのである。

そして、2008年12月、ケビン・ラッド首相は公式謝罪を行った。彼が政権を手にして初回の国会の開幕に先立ちおこなわれたこの謝罪では、盗まれた世代の被害者たちを国会に招き、心からの言葉として謝罪を伝えた。オーストラリア各地で大型スクリーンが街頭や公園に持ち出され、職場ではみんなが仕事の手を休めて集まり、首相のスピーチに聞き入り、感涙した。オーストラリア国中が沸き立つ出来事であり、「謝罪」がナショナル・アイデンティティを象徴するものとしていかに大きな問題であるのかを示していた。

我々は、これまでの歴代の議会と政府の法律と政策が、我々の国民に対して多大な嘆きと被害と喪失を与えたことについて、謝罪します。中でも特に、アボリジニとトレス海峡民の子どもたちを、その家族、社会、土地から奪ったことに謝罪します。盗まれた世代の人々とその子どもたち、そして残された家族たちの被害と苦難、痛みに対し、ごめんなさい。お母さん、お父さん、兄弟姉妹の方々に対し、家族と社会を崩壊させたことに対してごめんなさい。誇りある人々と誇りある文化に負わせることになった不名誉と屈辱に対し、ごめんなさい。

(中略)

盗まれた世代の方々以下に以下の言葉を捧げます。首相として、ごめんなさい。オーストラリア政府を代表して、ごめんなさい。議会を代表して、ごめんなさい。

そして一人の人間としてごめんなさい。過去の議会が成立させた法律によって、議会があなた方に与えた傷と痛みと損害に謝罪します。そして、これらの法が、侮蔑的で、差別的で、恥辱的なものであったことを謝罪します。これらの謝罪を政府と議会の行動によってその生活が破壊された、母親たち、父親たち、兄弟姉妹たち、家族の方たちそしてコミュニティの人々に捧げます⁶⁾。

謝罪ののち、国会では、補償と賠償についての議論が始まった。盗まれた世代に焦点をあてた「先住民ヒーリング基金 (Aboriginal and Torre Strait Islander Healing Foundation)」を設立することも約束された。しかし、盗まれた世代に対する全体的な補償、賠償の枠組みは合意されておらず、これまでに2件の州レベルでの補償と、タスマニア州での賠償枠がしめされただけである⁷⁾。このことは、何を意味しているのだろうか？このことについては、結論部で考察してみたい。

和解に向けたイベント

1980年代の議論をうけて、アボリジニと主流社会との和解をめざす目的で、政府は、1991年に和解委員会法案を通過させ、10年の予定で和解委員会が組織され、活動を開始した。全国から委員があつまり、議論を重ね、国家的なアボリジニとの和解を達成する目的で様々な催しが企画され、実行に移されていった。

具体的には、様々な教育プログラムや、パブリックコメント、イベントなどを通して、アボリジニの現在の苦境とその歴史的背景を国民全体が正しく理解し、新しい関係性に向かうことが目指された。ここでも、「盗まれた世代」によって絆が断ち切られたことによって続く、現代アボリジニ社会の負のサイクルが強調された。学校教育のカリキュラムの整備や、多彩な公共イベントなどで、具体的になにをすべきかが話し合われた。

この委員会設置の直接のきっかけとなったのは、監獄死問題についての王立委員会による報告書であった。1988年に提出された報告書では、アボリジニに対する差別的取扱いの改善とともに、彼らの社会の負のサイクルを解決するには、オーストラリアの国民全体がアボリジニの経験を共有、理解する必要があると進言された。それらを受けて、和解委員会が設置されたのである。しかし、委員会の企画の内容は、1997年に盗まれた世代の報告書が出され、それ

に対してハワード首相が謝罪を拒み、歴史戦争が活発になる中で「ごめんない Sorry」というのか言わないのかが論点となっていた。「盗まれた世代」がしだいに焦点となっていたのである。

たとえば、1997年には「手の平の海 (Sea of Hands)」というイベントがはじめられた。手の平の形に切り抜いた色とりどりのプラスチックを地面に刺して、インスタレーションにするものである。「先住権原へ向けてのオーストラリア人 (Australians for Native Title)」という NGO が設立され、ここが中心となっておこなった。1997年10月に国会議事堂前の芝生広場に一面に色とりどりの手の平型の板がたてられたのをはじめとして、その後オーストラリア各地で、同様のイベントが続けられた。実際の設営にかかわる人々だけでなく、だれでもがインターネットで、手の平を登録することができるシステムになっている。名前と、「ごめんない (Sorry)」などのアボリジニへのメッセージを添えて登録すると、それは一つ一つの手の平に刻まれ、公園や海岸などのインスタレーション会場にたてられるのである。これまでに250万人の人がこの登録を行ったという。

1998年には、「盗まれた世代」の調査報告が出された日から一年目の5月26日、最初の「謝罪の日 (Sorry Day)」が開催された。前述の NGO は、この日に、謝罪帳 (Sorry Book) というキャンペーンを行った。政府が謝罪を拒んでいる状況を不満に思い、何か行動したいという人々のために企画されたものであった。この日、シドニー港の中心地であるサーキュラーキーで、謝罪の日の式典が行われた。式典に出席した来賓が、謝罪帳にサインをし、その後4冊のノートがサーキュラーキーの主だった場所におかれ、この日だけで5000人がサインしたという。人々はここに、政府に対する批判や、自分のアボリジニへの思いを記入した。その後、公式謝罪帳は650冊用意され、オーストラリア全土にひろげられ、各地で記帳されていった。謝罪帳は、各地の役所、図書館、学校、博物館、美術館、教会、本屋などにおかれ、またボランティアの手で回覧された。ネット上でも署名ができるようなシステムもとられ、これまでに2万5000人ほどが署名したという⁸⁾。

ノートの1ページ目には、以下のような文言が記されていた。

ここに署名することで、私はヨーロッパ人の入植の結果としてオーストラリアの先住民の人々が被った不正義に深い遺憾の意を示します。特に、家族から子供たちを強制的に引き離したことによる痛みと傷に対して、そ

してオーストラリア先住民の人々の人間としての尊厳と精神に対して、政府の政策が与えた影響に、個人的な謝罪を表明します。

私はまた、和解と国民全体のより良い未来のための希望を記したいと思います。私は、われわれの大地に敬意を払い、アボリジニとトレス海峡民の伝統を尊重し、全ての人に正義と平等を与える、統一されたオーストラリアを達成する努力をします⁹⁾。

2000年には、「和解への行進 (Walk for reconciliation)」とよばれるイベントが「コロボリー 2000」の一部として行われた。これは和解委員会の呼びかけでおこなわれた。2000年の5月26日のソーリー・デイに、和解委員会が最終報告書を提出するにあたって、コロボリー 2000が組織されたが、その中心となったのが和解への行進であった。シドニーのハーバーブリッジを車両通行止にし、人々に和解への意志をあらわすための行進をすることを呼びかけたものである。全国から25万人があつまり、人々は手にアボリジニの旗とオーストラリアの国旗を持ち、多くの人が「Sorry」と書かれたTシャツをきて、オペラハウスに向かって北から南へ橋を渡った。空には、飛行機雲で「Sorry」の文字が描かれた。人々は、政府は公式謝罪を拒んでいるが、我々は「盗まれた世代」に対して、「Sorry」と思っているという表明をおこなったのである。これ以降、同じような「和解への行進」イベントが各地で次々と開催された。これまでに総計で100万人もが参加したとわれている。

これら以外にも、和解公園が作られたり、盗まれた世代のための記念碑がたたられたり、と、オーストラリア中の各地で、アボリジニへの謝罪の気持ちを象徴的にあらわすイベントや記念行事が繰り返し行われたのである¹⁰⁾。

大衆文化における表象

盗まれた世代問題は、1980年代から歴史や人類学の分野をはじめ学術界を中心に盛んに議論されるようになった。同じころそれまでオーストラリア史から排除されてきていたアボリジニを、国家の歴史に取り込む動きが明確になっていた。そして、学会以外の場でも、この問題はしだいに注目をあつめるようになり、メディアにも盛んに登場した。ここではこのテーマを取り上げた代表的な映画、番組、小説、舞台などを、時系列的に整理してみよう(表1)。

1983年には、『たったの6ペンス (Lousy Little Six Pence)』という、ジェラルド・ボストック (Gerald Bostock) とアレック・モーガン (Alec Morgan) による短編映

表1 メディアに登場した盗まれた世代問題

発表年	題名	作者/監督	種類
1983	『たったの6ペンス』 (Lousy Little Six Pence)	ジェラルド・ボストック (Gerald Bostock) / アレック・モーガン (Alec Morgan)	短編映画
1986	『ワンダリング・ガール』 (Wondering Girl)	グレンニス・ワード (Glenyse Ward)	自伝小説
1987	『マイプレイス』 (My Place)	サリー・モーガン (Sally Morgan)	自伝小説
1998	『ストールン』 (Stolen)	ジョン・ハリス (John Harrison)	演劇
1998	『ラディエンス』 (Radiance)	レイチエル・パーキンス (Lachel Perkins)	映画
1999	『City from the Heart』 (心の都市)	Kendell 1999	ドキュメンタリー番組
2000	『ハインズの人生の物語』 (Haines biographic story on his art work)		ドキュメンタリー番組
2000	『小さな王たちの土地』 (Land of the Little Kings)	クーティ・レヨンド (Kooti Rayond)	ドキュメンタリー番組
2000	『終了していない仕事』 (Unfinished Business)		ドキュメンタリー番組
2000	(10月) シドニーオリンピック閉会式		
2002	『裸足の1500マイル』 (Rabbit Proof Fence)	フィリップ・ノリス (Phillip Norris)	映画
2008	『オーストラリア』 (Australia)	バズ・ラフマン (Baz Luhrmann)	映画
2008	『マティナ』 (Mathinna)		パンガラダンスシアター

Indigenous Law Resources- Reconciliation and Social Justice Library (2012.3.18 参照)

画が製作された。これは、1900年代はじめのニューサウスウェールズ州での、アボリジニに対する労働搾取と生活状況のひどさ、そして「盗まれた」子供について、古い写真のクリップとアボリジニ自身が語っている映像を組み合わせたものである。この問題をテーマとしたごく初期の映画といえる。題名にある6ペンスというのは、「盗まれた」子供たちが、強制的に白人の主人のもとで労働させられ、支払われるはずだった金額で、彼らが受けとることのなかった給金である。

1986年には、グレンニス・ワード (Glenyse Ward) の自伝小説、『ワンダリング・ガール (Wondering Girl)』が出版された。この本は、「盗まれた」経験を持つ著者が、施設で育った経験を小説として発表したものである。ワードは、この経験のポジティブな側面を強調して描いており、アボリジニ側からの批判も起きた。

1987年に出版され、ベストセラーとなったサリー・モーガンの『マイプレイス (My Place)』もまた、「盗まれた」世代を経験した祖母、母のもとに育った著者が、自分のルーツを再発見し、アイデンティティを再獲得してゆく物語であった。この本は、オーストラリアでは非常に広くよまれ、児童用版もつくられ、戯曲化され、舞台にもなり、また日本をはじめとする数々の言語に翻訳もされた。

1998年には、ジョン・ハリスンによる演劇『ストールン (Stolen)』がメルボルンで初演された。その後、各地で上映されることになったこの戯曲は、5人の「盗まれた」子供たちのその後の人生を描いたものである。盗まれ、白人主人の暴力によって精神を病むことになった女性、白人の豊かな家族のもとに育つもののアボリジニの家族との出会いによって二つの世界の間で引き裂かれる思いを経験する女性、犯罪を繰り返し、刑務所を出たり入ったりしている男が、出所後ようやく居場所のわかった母が死亡しており、絶望と怒りの中で自殺する話、など複数の激しくつらい経験が重ねてつづられたものであった。

同じ年、レイチェル・パーキンスによる映画『ラディエンス (Radiance)』も公開された。盗まれた世代の娘たち三人が、母の死をきっかけに集まり、3人それぞれの傷ついた苦しい生い立ちゆえに、母との関係、姉妹の関係に葛藤し、乗り越えてゆくストーリーであった。

この時期、多くのドキュメンタリー番組も制作された。1999年には、『心の町 (City from the Heart)』、2000年には、『ハインズの生活史とアート (Haines biographic story on his art work)』が作られた。これは、盗まれた世代を経験したアーティストである Chris Edwards 本人の生い立ちと経験を作品にしたものであった。クーティ・レヨンド (Kooti Rayond) による『小さな王たちの土地 (Load of Little Kings)』は、歌手のアーチ・ローチ (Archie Roach) がオーストラリア各地を回り、盗まれた世代を経験した人たちの語りを聞いていくという番組であった。これ以外にも、オーストラリアの多文化、多言語のテレビ局である SBS (Special Broadcasting Service) では、やはり2000年に『未完の仕事 Unfinished Business』という番組名で、盗まれた世代をテーマとしたドキュメンタリーが放映された。

同じ年、2000年の10月には、シドニーでオリンピックが開催された。アボリジニが多くの場面で注目を集めたのだが、この閉会式では、オーストラリアの著名人として参加した、ロックバンド、ミッドナイトオイルのリーダーが、「ソーリー (Sorry)」と書かれたTシャツをきて登場し、話題となった。

2002年には、フィリップ・ノリス (Phillip Norris) 監督による劇場映画『裸足の1500マイル (Rabbit Proof Fence)』が公開された。これは、1931年に西オーストラリアでおきた実話に基づいた映画で、北部のアボリジニのステーションから「盗まれた」混血のアボリジニ3人の少女の物語である。南部のミッションに強制的に連れてこられた彼女らがミッションを逃げ出し、歩いて北部の母親たちのもとに戻ってゆくというストーリーであった。この映画は、日本をはじめ世界各国で公開され、大きな話題となった。70万ドルを超える興業売り上げも記録し、成功を収めた映画となった。これによって「盗まれた世代」問題は、世界的に知られるものとなったのである。そして、この映画の中でも、「盗まれた世代」の仲介者としてキリスト教ミッションの存在が強調された。強制的に車に連れ込まれる子供たち、泣き叫び嘆く母親たち、それを迎える断固としたキリスト教の神父と修道女たち、そしてミッションで行われる理不尽な教育が描かれた。そして、映画の最後には、映画の少女たちのうち二人が年取った姿で登場し、この映画が実話であることが強調される構成を取っていた。

2008年には、『オーストラリア (Australia)』というバズ・ラフマン (Baz Luhrmann) 監督による作品が公開された。これは、オーストラリアの牧場を舞台とする第二次世界大戦前後の頃を描く歴史物語であり、ニコール・キッドマン主演によって話題となった。舞台となった農場で混血のアボリジニの少女が「盗まれ」そうになり、それを防ごうとして母親が死んでしまう悲劇と、混血のアボリジニの子供たちがキリスト教ミッションの施設に収容されるという場面があり、そしてそこが第二次世界大戦中に日本軍に爆撃されるエピソードが挿入されていた。

以上は、メディアに登場した盗まれた世代問題の話題となった代表的なものだけであり、完全なリストではない。しかし、それでもオーストラリアの1980年代から2000年代はじめにかけて、劇場映画、短編映画、ドラマ、ドキュメンタリー、小説、舞台、など、大衆文化においてこの問題が盛んに取り上げられ、表象されてきたことがわかる。このようなメディアでの表象は、人々が盗まれた世代という問題を、オーストラリア全体の問題として感じることを可能にしたことはまちがいがなく、そして、そこではくりかえし、キリスト教ミッションが仲介者として中心的な役割を果たしていたことが示されたのである。

おわりに：オーストラリア・アイデンティティの変容

オーストラリアは、1970年代にアングロ・サクソン、白人中心のナショナリズムから脱却し、新しい多文化的国家としてのアイデンティティを達成しようとしてきた。アボリジニへの歴史的不正義を認め、主流社会とアボリジニとの関係性を正し、異なる文化を尊重する国家へと変貌すべく努力を推し進めてきた。本論では、盗まれた世代に注目して、オーストラリア社会の中で、どのようにこのような認識の変化が広がり、共有されるようになってきたのかに注目して論じてきた。

まず、アボリジニに対する不正義をめぐって、オーストラリア社会の対応が、歴史的に展開してきたことを整理した。1990年代までには、アボリジニ側からの働きかけによって、アボリジニのおかれている状況は、社会的な問題であると認識されるようになり、90年代に入って先住権原が認められ、入植の経緯の不正義を認める前提が成立するようになっていたことを指摘した。

このような社会的雰囲気の中で、公式謝罪をめぐる政治的せめぎあいが続いた。具体的には、労働党と自由党の対立を中心として、歴代首相の、公式謝罪への対応の差であり、そのことが「盗まれた世代」をめぐる国家的議論につながったと指摘した。キーティング首相の1992年に行われたスピーチは、新しい異なる人々にも「公平なオーストラリア」を強く打ち出したものであり、現在も語り継がれているほどのインパクトを持ち、多くの人々が感動して耳を傾けた。それに対して1996年に政権についたハワード首相が謝罪を否定し続けたことによって、世論は二分されることになり、議論を呼んだのであった。

これらをふまえて、国家的な理解を促進する目的で行われた様々なイベント、盗まれた世代をテーマとしたメディアにおける表象を整理すると、1990年代から2000年代の初めにかけてのオーストラリアにおいて、謝罪が重要な社会的キーワードとなり、オーストラリアの新しいアイデンティティ構築において中心的な役割を果たしたといえることが分かった。

自由党と労働党の間での、この問題を巡るせめぎあいは、まさに白人的な古いオーストラリア・ナショナリズムと新しいオーストラリア・アイデンティティとの間でのせめぎあいであったといえる。各地で「和解への行進」と「手の平の海」などのイベントがおこなわれ、一般の人々が多数参加し、彼らが行動し、参与することが可能になった。また、人々はメディアを通じ、「盗まれた世代」

を国家的犯罪とみなし、感情を共有することになった。そして、それは、キリスト教ミッションを中心とする当時の記憶をネガティブにみることであった。このことが、オーストラリアの歴史認識に与えた影響は注目に値する。盗まれた世代という出来事を、自分たちの問題として共有することを可能とする仕組みであったといえるだろう。また、キリスト教全体の歴史的な地位の低下もこのことに大きくかかわっていることもまちがいない。

こうして、オーストラリアでは、精神的肉体的暴力の経験と、キリスト教ミッションと政府による組織的な強制についての語りや、国家の歴史として含まれることになった。アボリジニの経験は、「盗まれた世代」という強力で、ネガティブなストーリーに集約されていった。そして、そのことを受け入れ謝罪し、多様性、差異を認める、全ての人々にフェアな国、という新しいオーストラリア・アイデンティティの構築に貢献したのだといえるだろう。このように新しいアイデンティティを共有することに、「盗まれた世代」問題が中心的役割を果たした、と結論できる。盗まれた世代問題に注目することは、オーストラリアの近年の変化を知るうえで有効な視点であるといっていよう。

しかし、現在のオーストラリアが、多文化主義の異文化に寛容な国家に本当に姿をかえたのだ、と考えるのはあまりにナイーブに過ぎるだろう。この変化はそのように単純なものではありえない。そう述べる理由の一つは、本文の2章2節で指摘した具体的なアボリジニへの対応の欠如にあらわれている。国家全体が感激する公式謝罪を行ったにもかかわらず、具体的な補償はほとんど動いていない。それどころか、アボリジニに対しては彼らの自律性と権利を阻害するような「緊急措置」が2008年から発動され、それは継続されているのである [Altman & Hinkson 2007]¹¹⁾。

それらを見ると、理想とされる多文化主義的で平等なオーストラリア・アイデンティティは、イメージであり、建前にすぎず、現実にはヘゲモニーを握り続けているのは、アングロ・サクソンを中心とする主流社会であり続けていることがわかる。1900年代の前半とは異なり、キリスト教の重要性はオーストラリア社会では低下した。しかし、オーストラリアは、古いナショナリズムから脱却したようでありつつ、実は、理想とする新しいオーストラリア・アイデンティティによって、アングロ・サクソンを中心とした新しいナショナリズムの段階に入っただけなのかもしれない。

註

- 1) ニューサウスウェールズ植民地で1883年、クィーンズランドで1897年、西オーストラリアで1905年、そして南オーストラリアでは1911年に、それぞれアボリジニの子供を強制的に引き離すことを認める法令が作られた。北部特別州では、ノーザンテリトリー・アボリジニ法令がだされ、主任保護官にアボリジニを移動させる法的な権限をあたえた。
- 2) アボリジニ大使館は、1972年にアボリジニ権利獲得のための活動家たちが、当時の国会議事堂前の芝生広場に、政府がアボリジニの土地権を認めないことに対する抗議行動として、ビーチパラソルをたて、「大使館」と張り紙をしたことに始まる。この年複数回、強制的に撤去されるが、繰り返し再建された。その後も政治的な流れの中で幾度も建てられることになるが、1992年には、現在のようなトタンと木枠の永久的な建物になった。1995年には、オーストラリアの国家的建物として登録されている。1998年からは平和と正義のための聖火が燃やされ続けており、アボリジニの抗議と抵抗のシンボルとなっている。
- 3) ウェーブヒルのストライキ、イルカラ裁判、エアーズロック返還など [Griffiths 1995, 窪田 2003 ほか]
- 4) 訳出部の原文は以下の通り [Attwood & Markus (eds.) 1990]。

It begins, I think, with the act of recognition, Recognition that it was we who did the dispossession. We took the traditional lands, and smashed the traditional way of life. We brought the disasters. The alcohol. We committed the murders. We took the children from their mothers. We practiced discrimination and exclusion. (中略)

It was our ignorance and our prejudice. And our failure to imagine these things being done to us. With some noble exceptions, we failed to make the most basic human response and enter into their hearts and minds. We failed to ask – how would I feel if this were done to me?

- 5) 謝罪の日付と謝罪者は、以下の通り。

1997年5月27日西オーストラリア州、リチャード・コート氏 (Richard Court) 州知事 (Premier)、ジェフ・ギャロップ氏 (Geoff Gallop) 野党代表 (Leader of the Opposition)

1997年5月28日南オーストラリア州、ディーン・ブラウン氏 (Dean Brown) 州アボリジニ問題大臣 (Minister for Aboriginal Affairs)

1997年6月3日クィーンズランド州 K.R. リンガード氏 (K.R.Lingard) 州家族、若者、共同体大臣 (Minister for Families, Youth and Community Care)

1997年6月17日 首都特別区、ケイト・カーネル氏 (Kate Carnell) 特別区首席大臣 (Chief Minister)

1997年6月18日ニュー・サウス・ウェールズ州、ボブ・カー氏 (Bob Carr)、州知事 (Premier)

1997年8月13日タスマニア州、トニー・ランドル氏 (Tony Rundle)、州知事 (Premier)

1997:9月17日ビクトリア州、ジェフ・ケネット氏 (Jeff Kennett)、州知事 (Premier)

2001年10月24日北部特別区、クレア・マーチン氏 (Claire Martin)、特区知事 (Premier)

以上のほかに、2001年11月24日には、法王ヨハネ・パウロ2世が、盗まれた世代にかかわって行った過去の行為、特に性的虐待について謝罪を行っている。<http://eniar.org/news/pope1.html>

6) 訳出部の原文は以下の通り。

We apologise for the laws and policies of successive parliaments and governments that have inflicted profound grief, suffering and loss on these our fellow Australians.

We apologise especially for the removal of Aboriginal and Torres Strait Islander children from their families, their communities and their country.

For the pain, suffering and hurt of these stolen generations, their descendants and for their families left behind, we say sorry.

To the mothers and the fathers, the brothers and the sisters, for the breaking up of families and communities, we say sorry.

(中略)

To the stolen generations, I say the following: as Prime Minister of Australia, I am sorry.

On behalf of the government of Australia, I am sorry.

On behalf of the parliament of Australia, I am sorry.

I offer you this apology without qualification.

We apologise for the hurt, the pain and suffering that we, the parliament, have caused you by the laws that previous parliaments have enacted.

We apologise for the indignity, the degradation and the humiliation these laws embodied.

We offer this apology to the mothers, the fathers, the brothers, the sisters, the families and the communities whose lives were ripped apart by the actions of successive governments under successive parliaments

- 7) 2002年、ニューサウスウェールズ州で、最初の盗まれた世代への補償がおこなわれた。Valeri Linow は、16歳の時にお手伝いとして働いていた家庭で、性的暴行と虐待をうけ、3万5000ドルの補償金を受け取った。2006年には、タスマニアで「アボリジニの子どもの盗まれた世代法」が成立し、オーストラリアで最初の補償枠組みが設定された。保障パッケージとして、500万ドルが配分された。
- 2007年8月に、南オーストラリアの裁判所は、生後13か月で「盗まれた」ブルース・トレボロに対し、52万5000ドルの補償金を支払う決定をした。彼は10歳まで自分のアボリジニの出自を知らずに白人の家庭で育ち、そのころに初めて本当の母親に会うが、この段階で彼はどちらの文化にも属することができずにいた。その後、監獄や矯正施設を出入りをくりかえし、飲酒と喫煙、そして鬱状態によって劣悪な健康状態におちいった。裁判所は、彼の人生に対して政府が間違った収容を行ったことが、政府の義務の不履行であったと認めたのである。
- 8) 2004年には、461冊の謝罪ノート（ソーリーブック）が、オーストラリアの記憶に刻まれた盗まれた世代の記録として、ユネスコの世界登録に加えられた。

9) 原文は以下の通り。

'By signing my name in this book, I record my deep regret for the injustices suffered by Indigenous Australians as a result of European settlement and, in particular, I offer my personal apology for the hurt and harm caused by the forced removal of children from their families and for the effect of government policy on the human dignity and spirit of Indigenous Australians. I would also like to record my desire for Reconciliation and for a better future for all our peoples. I make a commitment to a united Australia which respects this land of ours, values Aboriginal and Torres Strait Islander heritage and provides justice and equity for all'

- 10) 2004年に、キャンベラの最高裁の近く、湖にのぞむ芝生広場につくられた和解公園に、「盗まれた世代記念碑」が建立された。また、2006年10月に、ニューサウスウェールズ州のキャンベルタウン近くのアナン山に、盗まれた世代記念碑が除幕された。
- 11) 2008年に、アボリジニの村で暴力が蔓延しており、子どもたちが被害をうけており、緊急対策が必要であるとして、北部特別州のアボリジニの村落に対してとられるようになった方針をいう。警察による管理強化、子どもの健康チェック、村落への入城許可制の廃止、アルコールと麻薬の禁止、社会福祉金の使途の管理などが含まれており、人権差別的方針であるとして、批判が集まった。現在もこれは、格差縮小政策 (Closing the gap) として継続されている。

引用文献

Altman, J. and M. Hinkson

2007 *Coercive Reconciliation: Stablise, Normalise, Exit Aboriginal Australia*. North Carlton: Arena Publications Association.

Attwood, M.

2005 *Telling the Truth about Aboriginal History*. NSW: Allen & Unwin.

Attwood, M., and A. Markus (eds.)

1990 *The Struggle for aboriginal Rights: A documentary History*. NSW: St Leonards, Allen & Unwin.

Bird, C. (ed.)

1998 *The Stolen Children—their stories*. NSW: Random House.

Harris, J.

1990 *One Blood: 200 years of Aboriginal Encounter with Christianity*. Sutherland: Albatoross Books.

HREOC (Human Rights Equal Opportunity Commission)

1997 *Bringing Them Home: Report of the National Inquiry into the Separation of Aboriginal and Torres Strait Children and Their Families*. Sydney: Human Rights and Equal Opportunity Commission.

Goot, M. & T. Rowse (eds.)

2007 *Divided Nation?- Indigenous Affairs and the Imagined Public*. Carlton, Victoria: Melbourne University Press.

Griffiths, M.

1995 *Aboriginal Affairs: A Short History 1788-1995*. NSW: Kangaroo Press.

Read, P.

1981 *The Stolen Generations – the removal of Aboriginal children of New South Wales 1883 to 1969*. New South Wales Department of Aboriginal Affairs.

RCDC (Royal Commission into Death in Custody)

1998 National Reports, Regional Reports. *Indigenous Law Resources*. Council for Aboriginal Reconciliation Secretariat.
(<http://www.austlii.edu.au/au/other/IndigLRes/rciadic/>)

窪田幸子

2003 「この土地は私のものではない、この土地は私そのもの—オーストラリア先住民の権利回復の背景」山本真鳥・須藤健一・吉田集而編『オセアニアの国家統合と地域主義』（JCAS 連携研究成果報告6）pp.121-137。

Web

Link Up NSW <http://www.linkupnsw.org.au/> (2012.3.18. 参照)

Indigenous Law Resources- Reconciliation and Social Justice Library (2012.3.18 参照)